

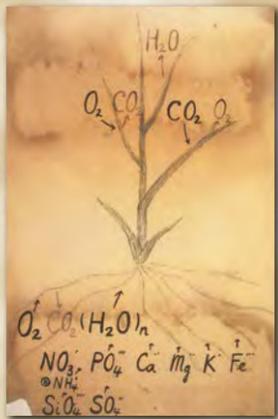


私が考える農業

宮沢賢治の「農」への思い

おれたちはみな農民である。ずるぶん忙がしく仕事もつらいもっと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい。われらの古い師父たちの中にはさういふ人もあつた。近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい。世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない。

新しい時代のダーウキンよ
更に東洋風静観のキャレンチャーに載って
銀河系空間の外にも至って
更に透明に深く正し地史と
増訂された生物学をわれらに示せ
衝動のようにさへ行なわれ
すべての農業労働を
冷たく透明な解析によって
その藍色の影をいっしょに
舞踏の範囲に高めよ



宮沢賢治直筆の教材絵図
(資料提供：宮沢賢治記念館)

『農民芸術概論綱要』序論から抜粋

資料提供：林風舎

農業が注目されていると言われて久しい。だが、議論される割に状況はさほど変わっていないのではないかと。そんな時は原点に帰ってみたい。宮沢賢治もその一人であるはずだ。現代日本で農業の最前線に携わる8人からも「私が考える農業」について伺った。

編集長・森 撰

農業技師として地元で実績

詩人・童話作家として知られる宮沢賢治(1896-1933)。「彼は当時においても、いや現代においても最先端を行く農業技師であり、地質学者です」。

『農業技師「宮沢賢治」』など賢治について6冊の著作がある藤根研一さん(元岩手県立農業大学校助教)がこう切り出したのには驚かされた。

賢治が教鞭をとった稗貫農学校は花巻農学校、花巻農業高校と名を変え、現在に至る。取材はその農業高校の校長室で2時間以上にわたった。賢治は1915年、盛岡高等農林学校(現岩手大学農学部)に首席で入学、関豊太郎教授の指導の下で地質調査研究をする。得業(卒業)論文は『腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値』だった。

花巻農学校で4年間あまり教えた後の1926年、「羅須地人協会」を設立し、地域の農業指導にあたった。そこで手書きの教材絵図を50枚ほど作ったのが現存しており、その1枚1枚が今でも立派に通用する内容だ。

童話で地球温暖化を予測も

では、農業技師としての賢治の神髄は何か。「まず、今という気象と大地ということを学問的に知っていたことです。はっきり言うなら、気象も大地も知らないでは、良い農業などは絶対にできません」(藤根さん)。

その意味で、賢治の作品で農業や自然との関わりが最もよく浮き彫りになっている作品が『グスコープドリの伝記』(1932)だろう。

——そして早くもその夏、ブドリは大きな手柄をたてました。それは去年と同じころ、またオリザに病気ができかけたのを、ブドリが木の灰と食塩(しお)を使って食いとめたのでした。(注：オリザ onza とはラテン語で稲)

——それから四年の間に、クーボー大

博士の計画どおり、潮汐(ちようせき)発電所は、イーハトーヴの海岸に沿って、二百も配置されました。
——ある晩ブドリは、クーボー大博士のうちをたずねました。
「先生、気層のなかに炭酸ガスがふえて来れば暖かくなるのですか。」
「それはなるだろう。地球ができてからいままでの気温は、たいいてい空気中の炭酸ガスの量でまわっていたと言われらるくらいだからね。」

一つ目の引用では石灰による植物の蘇生の効用を、二つ目では自然エネルギーによる発電を示唆した。三つ目の引用は、炭酸ガスによる地球温暖化を70年以上も前に認識していたことを示す、驚くべき記述だ。

賢治が勧めた「大地のミルク」

羅須地人協会をつくり、農業技師として働き始めた賢治は、周辺の農家に対して、それぞれの畑の土壌に応じた肥料を設計した。特に重きを置いたのは、前述の『グスコープドリの伝記』にもあるように、石灰(炭酸カルシウム)の効用だ。

『宮沢賢治科学の世界』によると、日本の土壌平均要素のうち、CaO(石灰)の濃度は0.6%と、英国の3.8%、フランスの4.1%、米国の1.3%より遥かに低い。フランスのぶどうの風味が高いのも、石灰分によるところが

大きいという。

賢治の研究を長くしてきた藤根さんは、石灰を「大地のミルク、母乳」と形容し、「人間にとっても植物にとっても、一番大切なのはカルシウム(石灰)。カルシウムのない土壌では、どんな有機栽培をやっても仕方がない」と話す。

冷害や凶作に悩まされた賢治のころの時代と比べて、農業技術は飛躍的に向上し、生産額は拡大し、少なくとも飢える人はいなくなった。だが、賢治が日本農業の現状をその目で見たら何を思うだろうか。

賢治は、農業は、時代の趨勢とかかわりなく、尊いものなのだと説いた。『農民芸術概論』の背景には「農民は芸術家なのだ」「農業は総合科学である」「君たちはどんな職業の人間よりも素晴らしい」との思いがあった。

だが、農業も、漁業や畜産業にして、最終の選択権は消費者にある。消費者が第一次産業のあり方を決めてきたし、これからもそうだ。日本の消費者は、賢治が願ってきたような農業の発展を支えられてきただろうか。

答えは「ノー」である。現代日本では、農産物の安全にまつわる情報が氾濫する一方で、正しい知識が今ひとつ消費者に伝わっていないのではないか。

賢治が勧める石灰についても、消



宮沢賢治が住み、「羅須地人協会」を置いた家(現在は岩手県花巻市の花巻農業高校内に移築)と、藤根研一さん

費者の間では、今でさえ「石灰は化学肥料ではないか」「あの白い粉はちよっと害があるような」などという誤解がまだまだ解けないという。

日本の消費者は食の安全性について関心が高いという通説があるが、現実にはほど遠い。偽装や法令違反、食中毒が起きた時に大騒ぎするだけだ。

消費者が支えてこそその農業

事実、日本の農産物全体に占めるオーガニック(有機農産物)の割合は、0.16%(2005年、IFOAM調べ)。スイスの10.9%や、イタリアの8.4%に遠く及ばないだけでなく、

米国(0.5%)や中国(0.41%)にすら遅れを取る。日本人に「中国の食品や農産物は怖い」という資格はない。

消費者の環境に関する行動を評価・比較する「グリーンデックス(Greendex)2009」(米国ナショナル・ジオグラフィック協会など主催)が「食品」「消費財」など4部門、65の指標によって総合的に評価した結果、日本は17カ国中15位という結果だった。(16位はカナダ、17位は米国)。環境に配慮した消費行動という点にお

いて、日本は国際的にも遅れている。花巻農学校退職にあたっての『生徒諸君に寄せる』の部分、「すべての農業労働を冷たく透明な解析によってその藍色の影をいっしょに舞踏の範囲に高めよ」の中に出てくる「藍色の影」とは、おそらくは、賢治にとって、農政上の困難や、消費者の無知を指すのだろう。

農業が「舞踏の範囲」にまで高められるためには、農業生産者だけではなく、消費者の理解と応援が不可欠だ。それが「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」ところのように思えてならない。